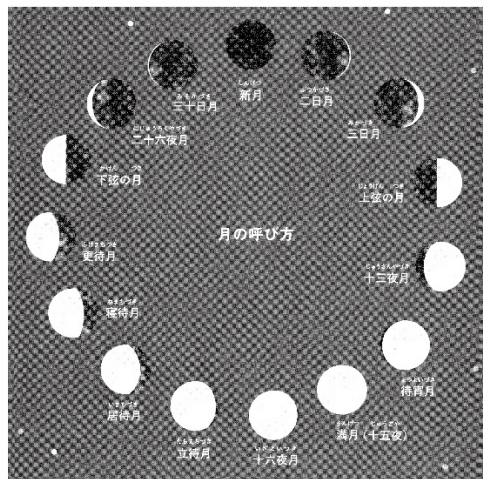


## 日本人と月

神秘的な美しさで人の心をつかむ



暦の成り立ちにも深く関わり、十五夜のような行事にもあるように、月は日本人の暮らしにとっても身近な存在です。

月は古くから和歌や俳句に詠まれ、親しまれてきました。夜空を見上げて目に映る月は、満ち欠けにより形を変え、その神秘的な美しさは人の心をつかみます。

何かを始める際の好機を月に委ねたり、時の経過を数える目印として月を見上げた経験がある人もいるのではないのでしょうか。

風情のある呼び名にも注目すると、日本人が長年愛してきた月の存在をもう少し身近に感じられるかもしれません。今宵、月を見上げて時を感じてみませんか。

国旗・神棚は当社でもお頒ちしております。(国旗一セット 二千円・神棚各種)

一般に数え年で男性は二十五・四十二・六十二歳、女性は十九・三十三・三十七歳が厄年です。中でも男性の四十二歳、女性の三十三歳は大厄とされ、その前後を前厄・後厄といいます。

心身共に熟年に達し、社会的・家庭的・肉体的な変動や転機の時期であり、重要な節目になることが多いので、これらの歳を災いの多い年とするのは、単なる迷信とも思えません。こうした時、神前に参詣して自ら心を引き締め、誓いと覚悟を新たにすることは非常に意義のあることでしょう。

### 令和五年厄年表(数え年)

男性		女性	
平成11年生	25歳	平成17年生	19歳
昭和58年生	41歳(前厄)	平成4年生	32歳(前厄)
昭和57年生	42歳(本厄)	平成3年生	33歳(本厄)
昭和56年生	43歳(後厄)	平成2年生	34歳(後厄)
昭和38年生	61歳(還暦)	昭和62年生	37歳

※当社では節分(二月三日・金)に厄除祈願を行っております。  
午後九時まで随時受付  
尚、当日ご都合の悪い方はお電話にて他の日を御予約下さい。

## 厄除祈願

## 私たちの暮らしの中の氏神さま

### 氏神さまって？

皆さんの住んでいる地域には、必ずその土地を守ってくださっている神さまが祀られています。それが皆さんの毎日の生活に深い関わりを持っていて、地域の神社に氏神さまです。

往々にして氏神神社という呼び方を耳にしますが、「氏神神社」という名前の神社ではなく、氏神さまの神社を意味します。その名の通り、氏神さま、同じ氏を持つ人々の神さま、ということです。

氏神さまはもとも古代の生活集団として血縁関係にある同族団の祖先神で、その氏族の守り神として祀ったのがはじまりです。血縁関係にない人たちでも血縁のような強い絆で結ばれていたりと、氏神さまを共同でお祀りし、お互いの連帯感を強固なものにしていきました。

また、氏神さまといっても祖先を神さまとしてお祀りするものばかりでなく、その氏族に由緒の深い神さまをお祀りすることもありました。

### 氏神さまと産土神

氏神さまとは別に産土神と呼ばれる神さまもいらっしゃいます。産土というの、産声とか産着

とかいうように誕生を意味する「ウパス」と、土地を意味する「ナ」という語が重なって作られたともいわれ、人の生まれた土地を指す言葉です。

ですから産土神は、その人の生まれた土地を守ってくださる神さま、その土地の守護神です。また、結婚や仕事で他所に引越したとしても、自分の一生を通じてお守りくださる神さまでもあります。

農耕社会の古い時代にあっては、人々が移住することはほとんどなく、自分の生まれた土地で一生を終えることが大半でした。

氏神さまが、いうならば血縁集団の守護神から地縁集団の守護神へと移行していきます。その流れの中で鎮守神と産土神は同じような性格でしたから、地域の人々の暮らしの中で段々と混同されるようになり、時代の変遷とともに同じ意味で使われるようになりました。

こうしたことから、現在では一般に産土さまも氏神さまと呼んでいます。村落社会が祀った地域の神さまをも含んで氏神さまというの、氏神さまがもともと氏族の祖先神、守護神であったことを思えば、神さまと私たちがとの親しいつながりを表しているといえるでしょう。